

Title	創刊号のころ
Author(s)	梅垣, 清
Citation	Osaka Literary Review. 20 P.17-P.19
Issue Date	1981-11-30
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25581
DOI	10.18910/25581
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

創刊号のころ

梅 垣 清

先日、*O. L. R.* 同人会から、本誌が第20号を迎えることになったので、創刊当時の同人の一人として、当時の思い出などを書いてみないか、とのお手紙をいただいた。筆者が本誌の同人であったのは、確か、第4号か第5号までであったと記憶している。その当時から本誌は年一回の発行であったから、創刊以来約20年が経過したことになる。本誌創刊の企てに係わった一人として、*O. L. R.* がともかくも第20号を迎えたことは喜ばしいことである。本誌が、今後とも、同人諸氏の御努力により、一層の発展を遂げつつ更に号を重ねてゆくことを期待してやまない。

第20号を迎えることになった、という同人会からの手紙は、考えてみると、「お前は過去20年間にどれほどの勉強を重ねてきたか」という厳しい問いかけのようにも思えてくる。すると筆者の心にはわかにかに平静を失い始めるのであるが、これはあくまで安逸のうちに歳月を重ねてきた筆者個人の問題であり、今は元同人諸氏と共に本誌第20号の発刊を重ねて心から喜びたい。

O. L. R. の創刊号と第2号を書架より取り出してみた。確かに、20年という歳月に見合った古色を帯びていて、時の経過そのものが等しく事物に与えるある種の価値を感じさせはする。頁を繰ってみる。自分の論文に関する限り、今読み返すと誠に面映ゆい。本当は充分には理解できていないところを充分理解できているかのように断定的に書き立てている。作品の読解したいにもはなはだ怪しいところが認められる。20年前の自分と対面するのは文字通り、面映ゆい。しかし、昔の自分が面映ゆいと言うからには、当然、現在は恥ずかしくないものを物していなければならない筈だ。ところが大して変わっているようにも思えない。少なくとも、昔の自分を

面映ゆいと思える程には。「面映ゆい」と感じるのも事実であり、かといってさほど進歩したわけでもない。これは誠に奇妙なことである。

こうして *O. L. R.* の頁を繰っていると、記憶の定かさの度合いは違っていても、この同人誌にまつわるさまざまな事柄が想起されてくる。創刊号で印刷費の高さを思い知らされ、第2号の印刷を依頼すべく堺市の金岡にある刑務所に赴いたこと、合評会での真剣且ついささか滑稽なやりとり、等々。

創刊号の〈編集後記〉に目を移すと、そこには「(*O. L. R.* 同人)一同が決意を新たにし」といった意気込んだ文言が見られ、またまた面映ゆさをを禁じ得ないのであるが(〈編集後記〉には森晴秀氏と筆者の名が記されている)、続いて「各方面から御批判と御教示を頂ければ望外の幸せである」とある。そして、事実、本誌を送付して批判を仰いだ諸氏から「御批判と御教示」が届き始め、同人諸氏を喜ばせた。創刊号の編集代表者であった森氏の自宅に宛てて、本誌を送付させていただいた方々から葉書が送られてきた。筆者は、森氏がそれらをまるで年賀状の束の様にゴムで束ねて大学に持参したことを記憶している。5,60枚、いや100枚ほどもあったであろうか。「*O. L. R.* を御恵贈下さり有難うございました。いずれそのうちにゆっくりと読ませていただく積りです」という受取り状が多かったと記憶するが、中には執筆者にたいする懇切な助言や批判も含まれていた。筆者に限って書けば、筆者の、学部卒業論文に基づく誠に未熟な『S. アンダソンのワインズバーク・オハイオ』について、H大学(東京)のY氏(当時)から、アメリカ文学におけるグロテスクの系譜と関連させてアンダソンを論じてほしかった、という旨の有益なる評言をいただいた。

また第2号が発刊された時、J・エドワーズに関する拙論について、W大学(東京)のH氏(当時)から、ユニテリアニズムについては誤解があるようだ、という批判をいただいた。筆者は、アメリカ思想史の専門家であるP. ミラーの、ユニテリアニズムについての見解を踏まえて書いた積りであったのでH氏の批判は心外であった。しかしH氏がユニテリアニズムに特別の関心を持っておられるようでもあり、P. ミラーという権威に

寄りかかった筆者が間違っていたのかもしれないと反省した。エマソンをはじめとする超絶主義者達の、ユニテリアニズムについての見解は踏まえていたので、一度H氏に直接御意見を伺いたく思ったものであった。

博士課程を終えると、筆者は神戸のK大学に勤務することになった。この大学の非常勤講師の一人にK大学（京都）のT氏（当時）がおられた。この先生にも *O. L. R.* が送られていたのであろうか、ある時、筆者の拙論を読んだと言われた。そこで筆者がエマソンとエドワーズの間に認められる類似性について話し始めると、「両者の〈神〉にたいする観念が全く異なるので、類似性など論じられない」と厳しいお叱りをうけた。筆者が、でもアメリカにも、両者の類似性に関心を向けている学者もいますよ、と生意気にも反論めいたことを口にしたところ、T氏は、アメリカの研究者にそれほど信頼を置く必要はないという趣旨のことを言われた。筆者にとって、T氏の言葉は誠にショッキングなものであったし、多少の反撥を覚えもした。しかしその後、T氏の書かれたものを読むにつけ、氏が言わんとされたことが理解できるように思えた。エドワーズとエマソンの比較検討が無意味だとは今も決して思わないが、T氏の自負心からは筆者なりに教わる場所が多かった。

表紙の色褪せた *O. L. R.* を前に20年前を回顧し始めると次々と思いはつきない。過去20年の間、安逸を決め込みながらもなにほどかの書物は読んできた。しかし大した発展も遂げていないことを思うとじくじ(忸怩)たるものがある。ただ、*O. L. R.* 創刊当時と現在で変わった点といえば、アメリカの文学や思想が以前ほどには面白く読めなくなってきたということぐらいではなかろうか。例えば、20年前には感動すら覚えた『独立宣言』が、現在では、少なくとも部分的には、起草者の身勝手な一方的見解としか読めなくなってしまった。この変化が好ましいことかどうかは意見が分かれるところであろう。筆者自身は、やっとスタート・ラインに就いたものと思いたいのだが、もう黄昏が迫っている。もう一度 *O. L. R.* 創刊当時に戻れば、とつくづく思うこのごろである。